

大学生用お金に対する信念尺度の作成

渡辺 伸子*

Development of the Money Beliefs Scale for University Students

Nobuko WATANABE*

The Money Beliefs Scale for university students was developed to assess beliefs about money. In a pilot study, author used the Sentence Completion Test to collect 535 sentences about money beliefs. These sentences were sorted into categories and five categories were adopted for the scale. A questionnaire based on these five categories was developed and administered to participants. Factor analysis of their responses identified five factors. In Study 1, new items were added and the same five factors were identified; Negative effects, Equivalent value of work, Difficulty of acquisition, Positive effects, and Importance. Correlations between Money Beliefs Scale and the Money Attitudes Scale, the Vocational Motivation Scale, the REC Scale and Job Status indicated that the scale has sufficient validity. In Study 2, Money Beliefs Scale was administered twice at an interval of three weeks and the test-retest reliability of the scale was established. The need to investigate associations between money beliefs and family budget behaviors are discussed.

key words: money beliefs, attitudes towards money, scale

問題と目的

お金には、交換の道具としての機能（一般的交換手段）、価値の高さを測り表す機能（価値尺度手段）、価値を保存する機能（価値貯蔵手段）があるとされる（片平，2003）。このように、お金は多義的な存在であることから、お金に対する考え方も多義的であると考えられる。Lindgren（1980，原岡訳1988）は、お金に関わる際の行動傾向や態度を理解することは、自分自身や他者を理解することにつながると述べている。そこで、本研究では、お金に対する考えを測定する、信頼性と妥当性を備えた尺度を作成することを目的とする。

お金への認識を含めた、お金への態度の個人差は“お金に対する態度 (money attitudes; Yamauchi & Templer, 1982)”として概念化されている。渡辺・佐藤 (2010) は、お金に対する態度を、お金に対する考え、お金に関連する行動、お金に関連して生じる感情を総合

的に個人差として取り扱ったものであると概括し、お金に対する態度を測定するさまざまな尺度の下位尺度を認知的側面、行動的側面、感情的側面の3側面に分類し整理している。本研究では、ある一時点に限定して考えた場合、お金に対する何らかの認知の個人差が行動や感情の個人差をもたらすという立場を採用し、お金に対する態度の3側面の中でも、特に認知的側面に特化した尺度を作成する。

お金に対する態度は、退職を予測すること (Tang, Kim, & Tang, 2000)、お金の使い方と関連を示すこと (Hayhoe, Leach, & Turner, 1999; Li, Jiang, An, Shen, & Jin, 2009)、ファイナンシャルリテラシーと関連を示すこと (Sohn, Joo, Grable, Lee, & Kim, 2012) が明らかになっている。

以上のように、お金に対する態度は、収入、消費、貯蓄といった家計に関する行動全般と関連を示すことが確認されている。お金に対する態度という共通の側面に着目することで、収入、消費、貯蓄の

* 筑波大学人間総合科学研究科

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8577, Japan

家計区分すべてにわたって、個人の家計行動が検討可能になると考えられる。

上記のような知見を積み重ねてきたお金に対する態度研究であるが、お金に対する態度を測定するために作成された尺度は複数ある。海外で作成された尺度のうち、使用頻度の高い尺度には以下のものがある。

第一は、お金に対する倫理的な態度を測定する尺度である Money Ethic Scale (以下, MES: Tang, 1992) である。“善”, “悪”, “達成”, “尊敬・自尊心”, “節約”, “自由・勢力”の6下位尺度30項目から構成されている。MESはアメリカの大学生と一般社会人のデータを併せて分析し、作成された。各下位尺度の α 係数は.68~.81, 2週間の間隔での再検査信頼性は.56~.83であった。MESはプロテスタント的労働倫理尺度や職務満足感との関連から、妥当性が検証されている。また、MESからは Love of Money Scale (以下, LOM: Tang & Chiu, 2003) が派生して作成されている。LOMは“成功”, “動機づけ”, “重要性”, “裕福”の4下位尺度17項目の尺度である。香港のビジネスマンを対象にして作成され、後の研究でもビジネスマンを調査対象として利用されている。Tang & Chiu (2003) では、LOMの信頼性と妥当性に関する記述はない。MESやLOMはお金に対する態度の中でも、倫理的な部分に着目した内容となっており、お金に対する態度を広く扱っているとは言えない。

第二は、お金に関連する思考や行動を測定する尺度である Money Beliefs and Behaviour Scale (以下, MBBS: Furnham, 1984) である。“強迫性”, “勢力・使用”, “保存”, “安心・保守的”, “不足”, “努力・能力”の6下位尺度51項目から構成されている。MBBSはイギリスの一般社会人からデータを得ている。MBBSも、信頼性と妥当性に関する明確な記述はなく、尺度としては不十分である。

第三として、精神分析家などによる理論的な指摘を参考に作成された Money Attitudes Scale (以下, MAS; Yamauchi & Templer, 1982) がある。MASは“勢力・名声”, “保存・時間”, “不信”, “不安”の4下位尺度29項目から構成されており、 α 係数は.69~.80であった。MASはアメリカの一般社会人からデータを得ている。マキャベリアニズム尺度や状態・特性不安尺度、肛門期性格尺度などとの相関が

ら、妥当性の検証が行われている。MASは理論的背景が強く想定されており、内容が十分であるとは言えない。

以上、3種類の主要な尺度を紹介したが、信頼性と妥当性が十分に確認されているとはいえない。お金に関する事柄には文化の影響が強いとの指摘もあるように (Furnham & Argyle, 1998), これらの尺度を日本で適用することには困難がある。よって、日本では独自の尺度を作成するのが現実的と考えられる。

他方、日本では原岡 (1990) が6下位尺度53項目の“お金に対する態度尺度”を作成している。自由記述の収集は一般社会人を対象にして行い、因子分析のための質問紙調査は大学生を対象にして行っている。下位尺度は、お金への良いイメージを測定する“お金の社会的価値”, お金への悪いイメージを測定する“社会における諸悪の根源”, お金を取り巻く社会の仕組みへの態度を測定する“社会や人生を狂わせるマネーゲーム”, お金の使い方の規範を測定する“お金の使い方と人生の意義”, お金に関連した快感情を測定する“金儲けと使用の楽しみ”, 借金などへの考えを測定する“お金の利用と処世術”である。しかし、下位尺度の α 係数は.52~.85となっており、信頼性の低い下位尺度が一部含まれている。この尺度は日本で作成され、日本語で利用できる唯一のお金に対する態度の尺度であるが、その後ほとんど使用されていない。また、この尺度は時代の影響を強く受けた項目となっており、現在使用するにはそぐわない内容も含まれている。さらに、妥当性の検証として、“実際に自由に使える金額”と“自由に使いたい金額”を尋ね、金額を3群に分けて各下位尺度の得点を比較しているが、この手法で妥当性の検証が十分に行われたと言えるのかは疑問が残る。以上の点から、現在の時代にあった内容の、信頼性と妥当性を備えた尺度を新規に作成する必要性が存すると言える。

以上の論点を踏まえ、本研究では、お金に対する考えを測定する日本の社会や文化に対応できる尺度を新たに作成することを目的とする。なお、本研究ではお金に対する態度の中でも、お金をどのようなものと捉えているか、つまり認知的な側面に着目する。前述のように、お金に対する態度は認知・感情・行動の3側面に分類されているが、本研究では

お金に対する何らかの認知の個人差が行動や感情の個人差をもたらすという枠組みを採用するためである。

以降、本研究では、お金に対する態度の認知的側面を指して“お金に対する信念”と呼ぶこととし、尺度を作成する。経済的合理性の観点で考えた場合、各個人がお金に対して抱いている見方や考え方が正しいあるいは間違っていると判断することは難しい。そのため、適切さの意味合いを含む“認知”ではなく、正しいかどうかは別にして、強く信じている様を意味する“信念”の語を用いることにした。

なお、本研究では大学生を調査対象とする。大学生は在学中に就職活動に取り組む時期であるため、お金の存在を強く意識していると考えられる。そのため、他の年齢段階と比べて、お金に対する信念の測定に適していると考えられる。しかし、大学生は社会人と比較すると、自らの所得によって生計を成り立たせたり、家や車などの高額な商品の購入をしたりする体験が少ないと考えられる点では、部分的に未熟である。しかしながら、社会人を対象として調査を行った場合には、職業や社会的地位、そしてそれらに関連した過去の体験といった多くの要因の影響を考慮する必要があり、結果の解釈が難しくなるおそれがある。その点において、大学生は社会的地位や過去の体験に大きな差はないと見なすことができるため、本研究では大学生を調査対象とすることとした。なお、原岡(1990)において行われた因子分析のための質問紙調査の対象は大学生であり、

大学生にはお金に対する事柄について、十分な回答能力があると判断される。

予備調査 お金に対する信念の内容の検討と尺度項目作成

お金に対する信念にはどのようなものがあるか確認するため、大学生および大学院生146名(男性58名、女性86名、不明2名：平均年齢24.72歳、SD=8.93)を対象として、2010年2月から5月にかけて、文章完成法による調査を行った。“あなたにとって、『お金』はどのようなものですか(お金の意味や、お金の性質など)”と教示し、“お金は、___。”という未完の文章を完成させる手続きをとった。記入欄は、5つ用意した。得られた535件の記述を、筆者および心理学を専攻する大学院生2名の合計3名で分類し、尺度に採用する概念を選定した。分類の結果をTable 1に示した。分類の結果、記述数が多く内容としてもお金に対する信念の個人差を測定することが可能と考えられる“重要性”、“ポジティブな影響源”、“ネガティブな影響源”、“労働とのつながり”、“トラブルの原因”の5カテゴリーに基づいて尺度を作成することにした。“重要性”は、「お金は、生きていくうえで必要なものだ」などの記述で構成され、生活のうえでのお金の必要性を示した内容であった。“ポジティブな影響源”は、「お金は、気持ちにゆとりを持たせてくれる」などの記述で構成され、お金が人間に対して、余裕などの心理的に良い影響をもたらすという内容

Table 1 文章完成法により得られた記述の分類

カテゴリー	尺度への採用 ^{注1)}	内容	記述数
重要性	○	お金の重要さ、有用さ。	215
人への影響	○ ^{注2)}	お金は人にポジティブ・ネガティブな影響を与える。	58
労働とのつながり	○	お金は仕事の結果得られるものだ。	30
トラブルの原因	○	お金は対人関係のトラブルのもとになる。	14
道具的側面	△	モノが買えるなどの、お金の機能について。	70
感情・気持ち	×	お金は汚い、こわい。	85
両面的価値	△	お金の他にも大切なものがある。	22
慣用語	×	“お金は天下の回りものだ。”	8
規範	×	お金を～すべきだ、～すべきではない。	3
その他			30
			535

注1) ○は尺度に採用した概念。△は、お金に対する信念と考えられるが、個人差の測定に適さないと判断した概念。×はお金に対する信念ではないと判断した概念。

注2) 影響の方向性を考慮し、“ポジティブな影響源”と“ネガティブな影響源”に分割して利用することとした。

であった。“ネガティブな影響源”は、「お金は、人を狂わせる」などの記述で構成され、お金が人間に対して心理的に悪い影響をもたらすという内容であった。“ポジティブな影響源”と“ネガティブな影響源”は当初“人への影響”というカテゴリーにまとめられていたが、影響の性質を考慮し、分割して利用することとした。“労働とのつながり”は、「お金は、働いて得るものだ」などの記述で構成され、お金は労働に関連したものだという内容であっ

た。“トラブルの原因”は、「お金は、問題の原因になったりする」などの、お金があると対人関係などに問題が起こりやすくなるといった内容であった。

次に、予備的な因子分析を実施するための調査を行った。採用した5カテゴリーについて、各カテゴリーの項目が因子を構成するために不足のない項目数になるように配慮しながら、項目を作成した。筆者が作成した項目について、心理学を専門とする大学教員1名および大学院生1名が内容を確認し、修

Table 2 予備調査におけるお金に対する信念の因子分析結果

番号	当初の想定 ^{注)}		F1	F2	F3	F4	F5	共通性
35	T	お金は、仲たがいのものだ	.81	-.01	.09	.03	-.05	.67
39	T	お金があると、めんどろこが起るものだ	.79	-.02	.08	.06	-.05	.64
19	T	お金は、人間関係を壊す	.79	-.06	.01	-.01	-.08	.62
41	T	お金は、いざこざの原因だ	.79	-.08	.09	.02	-.06	.64
14	T	お金は、人間関係を悪くするものだ	.76	-.13	.01	-.13	.06	.62
17	N	お金は、人を意地汚くする	.68	.03	-.08	.00	-.01	.46
7	N	お金は、人をダメにする	.68	.05	-.12	-.03	.12	.50
33	N	お金は、人を不幸にする	.64	.00	-.11	-.12	-.02	.42
12	N	お金があると、人はダメになる	.61	.04	-.07	-.08	.13	.40
26	N	お金があると、人は悪いことを考えるようになる	.60	-.04	.05	-.04	.03	.37
4	T	お金は、トラブルの原因だ	.53	.12	-.05	.24	.00	.36
9	T	お金は、争いを生む	.53	.09	.00	.17	-.10	.31
30	N	お金があると、心が貧しくなると思う	.52	-.03	-.08	-.11	.07	.30
22	N	お金は、人の心を惑わす	.51	.08	.14	.12	-.01	.33
16	P	お金があると、心に余裕が生まれる	.01	.77	-.08	.04	-.03	.54
2	P	お金は、人にゆとりを与えるものだ	.02	.73	-.05	.01	.03	.50
11	P	お金があると、心が豊かになる	-.08	.66	-.03	.00	-.09	.43
6	P	お金は、人に自由を与えると思う	-.02	.64	.03	.01	-.07	.43
21	P	お金は、人を幸せにする	.03	.60	.18	-.11	.04	.49
29	P	お金は、人に活力をくれるものだ	.01	.60	.14	-.06	.08	.47
15	I	お金は、非常に重要なものだ	.06	-.03	.80	-.05	-.06	.61
20	I	お金は、生きていくためにとても必要なものだ	-.01	-.07	.79	-.03	.06	.58
32	I	お金は、大切だ	-.08	.00	.68	.15	-.03	.52
5	I	お金は、とても価値があるものだ	-.05	.09	.67	-.12	.02	.49
36	I	お金は、必要不可欠なものだ	.04	.15	.54	.05	.05	.43
34	W	お金は、得るのが大変だ	-.02	.00	.01	.84	.00	.71
31	W	お金は、稼ぐのが難しい	.02	.03	-.07	.80	-.08	.60
38	W	お金は、簡単には手に入らないものだ	-.03	-.07	.02	.74	.18	.64
27	W	働いてお金を稼ぐのは大変なことだ	.01	-.04	.01	.70	.01	.50
23	W	お金は、労働の対価だ	-.05	.03	.06	.04	.78	.64
13	W	お金は、自分で働いて稼ぐものだ	.03	-.10	-.02	.02	.75	.56
18	W	お金は、一生懸命働いた証拠だと思う	.07	.13	-.04	-.01	.69	.53
3	W	お金は、働いて得るものだ	-.05	-.21	.06	.02	.64	.41
42	W	お金は、自分のした仕事の評価だ	.02	.29	-.07	.01	.42	.29
			説明率					50.02%
			因子間相関	2	-.07			
				3	.07	.47		
				4	.09	.12	.28	
				5	.20	.16	.12	.28

注) T: トラブルの原因, N: ネガティブな影響源, P: ポジティブな影響源, I: 重要性, W: 労働とのつながり。

正を行った。その結果、5カテゴリーに対して42項目が作成された (Table 2を参照)。回答者に対して、“お金に対して、あなたが考えていることについてお聞きます。社会の常識や家族の意見などとは関係なく、あなた自身が考えていることについて教えてください。下の文に書いてあることをあなたがどの程度思っているか、○をつけて教えてください。あまり深く考え込まずに回答してください”と教示し、“そう思う(5)”, “まあまあそう思う(4)”, “どちらともいえない(3)”, “あまりそう思わない(2)”, “そう思わない(1)”の5件法で回答を求めた。調査には大学生313名(男性178名, 女性126名, 不明9名: 平均年齢19.07歳, $SD=1.62$)が協力した。

最尤法・プロマックス回転による因子分析の結果、固有値の推移と解釈可能性から5因子解を採用することとした。どの因子にも.40未満の負荷量しか示さなかった8項目を削除して再度分析を行い、34項目から構成される5因子解の結果を得た。全体の説明率は、50.02%であった。

第1因子には、“ネガティブな影響源”と“トラブルの原因”に対応して作成した項目が高い負荷量を示したため、“ネガティブな影響源”因子と命名した。第2因子は、“ポジティブな影響源”因子と命名した。第3因子は、“重要性”因子と命名した。第4因子には、“労働とのつながり”に対応して作成した項目のうち、お金を手に入れることの困難性を表す項目が高い負荷量を示したため、“獲得困難性”因子と命名した。第5因子には、“労働とのつながり”に対応して作成した項目のうち、お金を自分のした仕事の対価と捉える項目が高い負荷量を示したため、“労働の対価”因子と命名した。

“ポジティブな影響源”と“重要性”については当初想定していたとおりの因子が得られたが、“トラブルの原因”と“ネガティブな影響源”が共に1因子を構成した点では想定と異なる結果となった。また、“労働とのつながり”に対応して作成した項目が、“獲得困難性”と“労働の対価”の2因子を別々に構成した。

以上の結果から、本調査では、“ネガティブな影響源”, “ポジティブな影響源”, “重要性”, “獲得困難性”, “労働の対価”の5下位尺度を備えた尺度を作成することとした。なお、当初の想定と異なる因子を構成した“獲得困難性”と“労働の対価”にお

いて項目数が少なかったため、項目数のバランスをとるために、本調査では項目の追加を行う必要があると判断した。

本調査1 お金に対する信念尺度の作成と信頼性および妥当性の検討

目的

予備調査で見出された因子に基づき、内的一貫性と妥当性を備えた“お金に対する信念尺度”を作成することを目的とする。3種類の既存尺度および、アルバイトの状態を問う項目を用いて、併存的妥当性および構成概念妥当性の検討を行う。

1つめの既存尺度は、お金に対する態度尺度(原岡, 1990)である。お金に対する信念尺度は、お金に対する態度尺度の中でも認知的側面を測定している下位尺度と有意な相関を示すであろう。そこで、渡辺・佐藤(2010)で認知的側面と分類されている“お金の社会的価値(以下, “社会的価値”)”と“社会における諸悪の根源(以下, “諸悪の根源”)"の2下位尺度を用いて検討を行う。予備調査で得られた因子の中で、特に、お金に対する信念尺度のうち、ポジティブな内容である“ポジティブな影響源”と“重要性”は、お金に対する態度尺度のうちでもお金に対する良いイメージを反映した下位尺度である“社会的価値”と正の関連を示すと予測される。また、ネガティブな内容である“ネガティブな影響源”は悪いイメージを反映した“諸悪の根源”下位尺度と正の関連を示すと予測される。

さらに、お金に対する信念は労働とも関連していると考えられる。そこで、2つめの尺度として、就業動機尺度(安達, 1998)を使用する。就業動機尺度は、未入職者の持つ将来の職業に関連する動機を測定する尺度で、積極的に職業を探す志向を表す“探索志向”, 就業場面での人との出会いや交流を重視する志向を表す“対人志向”, 業績や給料を重視する志向を表す“上位志向”, 難しい仕事にチャレンジする志向を表す“挑戦志向”の4下位尺度から構成されている。労働に関する下位尺度である“労働の対価”は、就業動機尺度全般と正の関連を示すと予想される。一方で、同様に労働に関連する“獲得困難性”は、お金は手に入りにくいという考えであるため、就業の動機づけになるとは考えにくく、就業動機の各下位尺度とは無関連であろう。また、

残りの3下位尺度については、労働とは関係ない概念であるが、“ポジティブな影響源”と“重要性”はお金に肯定的な価値を置いた考え方であるため、これらの考えの高い者は、給料を重視すると考えられる。よって、“ポジティブな影響源”と“重要性”は“上位志向”と正の相関を示すと予想される。

そして、3つめの尺度として、REC Scale (佐々木, 1984) を使用する。REC Scale は、消費者の購買態度を、“合理性”と“情動性”の2次元で測定する尺度である。“合理性”は事前によく考えて買う物を決定するなど、計画的のある買い物傾向を測定する内容であることから“重要性”と正の相関を示すと考えられる。さらに、お金について考える際に収入を意識することによって、計画的な買い物行動に到ると予想されるため、“労働の対価”および“獲得困難性”も“合理性”と正の相関を示すと予想される。一方で、“情動性”は流行や広告、店員のすすめなどの要因によって買う物を決定する傾向であることから、お金は人に良い影響を及ぼすという考えである“ポジティブな影響源”と正の相関を示すことが予想される。なぜなら、“ポジティブな影響源”の得点が高い人は、買い物というお金を使用する行為から、心理的に良い影響を受けやすいことが想定可能なためである。

最後に、アルバイトをしているかどうかを尋ね、している者としていない者で各下位尺度の得点に違いが見られるか確認する。労働を体験することによって、お金は自分の労働によってもたらされるという考えは強まると考えられるため、“労働の対価”の得点は、アルバイトをしている者のほうが高いと予想される。また、働いてアルバイト代を受け取ることによって、お金は手に入りにくいという考えは弱くなると考えられることから、“獲得困難性”の得点は、アルバイトをしている者のほうが低いと予想される。さらに、働くことによってお金の大切さを身を持って感じるようになると考えられることから、“重要性”の得点はアルバイトをしている者のほうが高いと予想される。

方法

調査協力者 関東地方の国立大学1校、私立大学3校、および東海地方の私立大学1校の合計5校の大学の学生645名が調査に協力した。年齢の平均は20.31歳 ($SD=1.89$) であった。性別は、男性が229

名、女性が398名、不明が18名であった。欠損値のある回答については、分析ごとに使用可能な最大限を用いた。よって、以降は分析ごとに n を記載する。

調査時期 2010年9月から12月にかけて調査を実施した。

調査内容 (a) お金に対する信念の項目: 予備調査では項目数が少ない因子や、 α 係数がやや低い因子が見られたため、5つの因子の概念に対応する項目として19項目を新たに作成し追加した。よって、合計61項目となった。追加項目の作成は、予備調査と同様の方法で行った。追加した項目を含めると、“重要性”13項目、“ポジティブな影響源”11項目、“ネガティブな影響源”16項目、“労働の対価”11項目、“獲得困難性”10項目であった。回答は予備調査と同様に5件法で求めた。(b) 妥当性検討に用いる尺度: ① お金に対する態度の測定のため、原岡(1990)の作成したお金に対する態度尺度の中から、“社会的価値”と“諸悪の根源”の2下位尺度を用いた。5件法で回答を求めた。合計28項目であった。② 就業動機の測定のため、安達(1998)の作成した就業動機尺度を用いた。“探索志向”、“対人志向”、“上位志向”、“挑戦志向”の4下位尺度である。5件法で回答を求めた。合計38項目であった。③ 購買態度の測定のため、佐々木(1984)の作成したREC Scaleを用いた。“合理性”と“情動性”の2下位尺度である。5件法で回答を求めた。各6項目であった。(c) アルバイトの状態: 現在アルバイトをしているかどうかを2件法で尋ねた。(d) デモグラフィック変数: 性別、年齢について尋ねた。

調査手続き 質問紙は、授業時間の一部を利用して実施した。倫理的配慮として、調査への協力は自由であることおよび、調査に協力しない場合でも不利益が生じないことを質問紙の表紙に明記した。調査に際しては、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会の承認を受けた。なお、実施の都合上、いくつかの組み合わせの調査票を作成して実施したため、調査協力者はすべての項目に回答したわけではない。

結果と考察

お金に対する信念の構造の確認 お金に対する信念の項目について因子分析を行った ($n=625$)。予備

Table 3 本調査1におけるお金に対する信念の因子分析結果

番号	当初の 想定 ^(注1)		F1	F2	F3	F4	F5	共通性
41	N	● ^(注2) お金は、いざこざの原因だ	.81	-.01	.05	-.04	.08	.68
19	N	● お金は、人間関係を壊す	.80	-.06	-.02	.12	-.07	.66
45	N	● お金は、人との関係によくない影響を与える	.78	-.09	.01	.01	-.02	.59
39	N	● お金があると、もめごとが起こるものだ	.75	-.04	-.09	-.04	.06	.59
35	N	● お金は、仲たがいのものだ	.75	-.08	.06	.07	.00	.58
14	N	● お金は、人間関係を悪くするものだ	.73	-.01	.02	.05	-.09	.56
17	N	● お金は、人を意地汚くする	.68	.05	-.07	.01	.05	.47
33	N	● お金は、人を不幸にする	.59	.03	-.03	.15	-.22	.41
4	N	● お金は、トラブルの原因だ	.58	.02	.04	-.14	.17	.37
12	N	● お金があると、人はダメになる	.57	.16	-.09	-.01	-.03	.35
7	N	● お金は、人をダメにする	.54	.18	-.08	-.05	.05	.34
9	N	● お金は、争いを生む	.53	-.04	.07	-.14	.20	.32
26	N	● お金があると、人は悪いことを考えるようになる	.53	.18	-.02	.08	-.12	.35
18	W	● お金は、一生懸命働いた証拠だと思う	.00	.72	-.06	.10	-.01	.49
55	W	● お金とは、仕事の結果として与えられるものだ	-.08	.71	.01	.09	-.04	.50
23	W	● お金は、労働の対価だ	.05	.69	-.09	.01	.03	.45
42	W	● お金は、自分のした仕事の評価だ	-.03	.67	-.03	.28	-.06	.50
13	W	● お金は、自分で働いて稼ぐものだ	.09	.67	.00	-.20	.01	.50
47	W	● お金は、自分が働いた分だけ手に入るものだ	-.01	.67	.05	.15	-.08	.48
3	W	● お金は、働いて得るものだ	.02	.65	-.02	-.22	.04	.45
51	W	● お金は、自分の力で手に入れるものだと思う	.04	.55	.13	-.16	.08	.44
59	W	● 働かなければ、お金は得られない	.03	.53	.17	-.04	-.06	.39
61	W	● 苦労しないでお金を手に入れようというのは、間違っている	.13	.52	.02	-.22	.01	.35
40	W	● お金は、働く楽しみだ	.02	.44	-.06	.19	.08	.25
31	D	● お金は、稼ぐのが難しい	.01	-.07	.88	.04	-.12	.67
34	D	● お金は、得るのが大変だ	.00	-.03	.80	.03	.04	.65
46	D	● お金を手に入れるのは、とても難しいことだ	.04	.03	.79	.08	-.03	.66
38	D	● お金は、簡単には手に入らないものだ	-.04	.06	.76	.05	-.05	.59
27	D	● 働いてお金を稼ぐのは大変なことだ	-.01	-.04	.66	-.06	.18	.50
50	D	● お金を稼ぐのは、甘くないことだと思う	.01	.19	.65	-.03	.04	.60
44	P	● お金があると、人にやさしくなれる	.00	-.04	.11	.64	-.10	.38
11	P	● お金があると、心が豊かになる	-.07	.04	.01	.63	.07	.44
57	P	● お金があると、積極的になれる	.01	.02	.05	.60	-.07	.33
6	P	● お金は、人に自由を与えようと思う	-.08	.12	-.05	.51	.12	.33
10	I-	● お金より大事なものが、この世にはないと思う	.19	-.11	-.05	.48	.03	.31
16	P	● お金があると、心に余裕が生まれる	-.07	.05	.04	.47	.20	.35
56	I	● いろいろな問題は、お金で解決できると思う	.19	-.18	-.08	.47	.00	.31
52	I	● お金が少なくなっただけでも、大変なことになるだろう	.10	-.02	.10	.44	.03	.25
24	I	● お金は、あればあるだけよい	-.14	.08	-.01	.43	.17	.28
1	I	● お金は、人生でもっとも大切なものだ	.09	-.04	-.02	.41	.15	.25
36	I	● お金は、必要不可欠なものだ	.06	-.01	-.08	-.04	.81	.60
48	I	● お金は、なくてはならないものだ	.05	.00	-.04	.03	.75	.57
20	I	● お金は、生きていくためにとても必要なものだ	.06	-.03	-.03	.04	.73	.55
32	I	● お金は、大切だ	-.08	-.02	.17	.02	.63	.50
15	I	● お金は、非常に重要なものだ	.02	-.02	-.04	.14	.61	.45
43	I	● お金がなくなったとしたら、非常に困るだろう	-.08	-.01	.14	.06	.50	.33
5	I	● お金は、とても価値があるものだ	-.05	.08	-.04	.25	.46	.37
説明率 45.41%								
因子間相関								
2 .20								
3 .23 .46								
4 .17 .06 .04								
5 .06 .22 .33 .41								

注1) N: ネガティブな影響源, W: 労働の対価, D: 獲得困難性, P: ポジティブな影響源, I: 重要性。-は逆転項目。
 注2) 採用された項目には項目の前に●をつけた。

調査と同様に、最尤法・プロマックス回転を用いて因子分析を行った。固有値の推移は、10.19, 6.59, 6.08, 3.06, 2.09, 1.82, 1.61…となっていた。固有値の推移からは3因子解や4因子解の採用も可能であった。しかし、3因子解や4因子解では解釈の困難さが目立ったため、解釈可能性が高かった5因子解を最終的に採用した。どの因子にも.40未満の負荷量しか示さなかった14項目を削除し、47項目で再度分析を行った。全体の説明率は、45.41%であった。47項目での因子分析の適合度は、 $\chi^2(856)=2105.31, p<.01$ であった。因子負荷量と因子間相関をTable 3に示した。

第1因子には、“ネガティブな影響源”に関する13項目が高い負荷量を示していたため、“ネガティブな影響源”因子と名づけた。第2因子には、“労働の対価”に関する11項目が高い負荷量を示していたため、“労働の対価”因子と命名した。第3因子には、“獲得困難性”に関する6項目が高い負荷量を示していたため、“獲得困難性”因子と命名した。第4因子には、“ポジティブな影響源”として作成した項目の他に、“重要性”として作成した項目の一部が.40以上の負荷量を示し、お金が人の心に与えるポジティブな影響だけでなく、お金の持つ力に対しても言及した因子となった。しかし、高い負荷量を示す項目が“ポジティブな影響源”のものであったため、第4因子はそのまま“ポジティブな影響源”因子と命名した。第4因子には10項目が高い負荷量を示していた。第5因子は“重要性”として想定した7項目が高い負荷量を示していたため、“重要性”因子と命名した。なお、尺度として簡便に利用することを考慮し、各因子に負荷する項目のうち、負荷量の高いほうから6項目ずつを尺度項目として採用することとした。採用された項目を用いて、下位尺度間の相関係数を求め、Table 4に示した。“ネガティブな影響源”と“重要性”の間を除くすべての下位尺度間で、有意な正の相関が見られた($r=.12\sim.41, p<.01$)。

各下位尺度6項目ずつの尺度構成の因子的妥当性を確認するため、確認的因子分析を行った。その結果、“労働の対価”と“獲得困難性”、“獲得困難性”と“重要性”、“ポジティブな影響源”と“重要性”、“ネガティブな影響源”と“獲得困難性”、“労働の対価”と“重要性”、“ネガティブな影響源”と“労働

Table 4 お金に対する信念尺度の下位尺度間の相関係数

	1	2	3	4
お金に対する信念尺度				
1 ネガティブな影響源	—			
2 労働の対価	.15** (643)	—		
3 獲得困難性	.23** (639)	.39** (641)	—	
4 ポジティブな影響源	.17** (638)	.15** (640)	.12** (636)	—
5 重要性	.07 (641)	.18** (643)	.30** (639)	.41** (638)

注) カッコ内は n 。* $p<.05$, ** $p<.01$ 。

Table 5 各下位尺度の基本統計量と α 係数

	n	平均	SD	α 係数
お金に対する信念尺度				
ネガティブな影響源	643	3.13	0.79	.90
労働の対価	645	3.97	0.70	.84
獲得困難性	641	4.29	0.65	.89
ポジティブな影響源	640	3.19	0.67	.74
重要性	643	4.36	0.55	.84
お金に対する態度尺度				
お金の社会的価値	125	3.32	0.62	.89
社会における諸悪の根源	125	2.81	0.62	.80
就業動機尺度				
探索志向	124	3.96	0.63	.85
対人志向	128	3.60	0.69	.82
上位志向	128	3.28	0.71	.80
挑戦志向	128	3.43	0.72	.81
REC Scale				
合理性	121	3.45	0.68	.66
情緒性	120	2.69	0.64	.66

注) 平均および標準偏差は、項目得点を単純加算したのち、項目数で除したものを記した。

の対価”の間に.14~.48の相関を仮定したモデルで高い適合度指標が得られた($\chi^2(399)=1078.87, p<.01$, $GFI=.90, AGFI=.88, RMSEA=.05$)。そのため、尺度は因子間に相互に関連がある5因子構造と考えられる。

基本統計量 各因子6項目ずつの素点を加算し項目数で除した得点および、各因子6項目での α 係数を、Table 5に示した。各下位尺度の α 係数は.74~.90と十分に高かった。

妥当性の検討 妥当性の検討を行う準備として、妥当性用の尺度の得点の平均、標準偏差、 α 係数を算出した(Table 5)。各尺度の平均には、素点を加算

Table 6 お金に対する信念尺度と各尺度間の相関

	お金に対する態度尺度		就業動機尺度				REC Scale	
	社会的価値	諸悪の根源	探索志向	対人志向	上位志向	挑戦志向	合理性	情動性
お金に対する信念尺度								
ネガティブな影響源	.21* (125)	.58** (125)	.13 (123)	.09 (127)	-.10 (127)	.14 (127)	.02 (121)	.06 (120)
労働の対価	.05 (125)	.21* (125)	.40** (124)	.18* (128)	.08 (128)	.26** (128)	.19* (121)	.10 (120)
獲得困難性	.07 (124)	.24* (124)	.17 (124)	-.02 (128)	-.03 (128)	.00 (128)	.18* (121)	-.07 (120)
ポジティブな影響源	.68** (123)	-.09 (123)	.02 (123)	.02 (127)	.28** (127)	.03 (127)	.04 (121)	.18 [†] (120)
重要性	.35** (125)	-.03 (125)	.08 (124)	.08 (128)	.28** (128)	.07 (128)	.17 [†] (121)	-.07 (120)

注) カッコ内は n 。[†] $<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$ 。

し項目数で除した値を用いた。

お金に対する信念尺度とお金に対する態度尺度の2下位尺度の相関係数を算出した (Table 6)。その結果, “ポジティブな影響源” と “重要性” が “社会的価値” と正の相関を示し, 予測と一致した結果となった (ポジティブな影響源: $r=.68, p<.01$; 重要性: $r=.35, p<.01$)。また, “ネガティブな影響源” が “諸悪の根源” と正の相関を示し, この点も予測と一致した結果となった ($r=.58, p<.01$)。

一方で, 予測していない部分にも有意な相関が見られた。まず, “ネガティブな影響源” が “社会的価値” と弱いながらも有意な正の相関を示していた ($r=.21, p<.05$)。“社会的価値” には, お金の良い面だけでなく, お金を必要悪と見なし, お金の悪い面をも是認するような項目が含まれていた。そのため, お金が人間関係に悪影響を及ぼしているという内容である “ネガティブな影響源” と正の相関を示したと考えられる。さらに, “労働の対価” と “獲得困難性” が “諸悪の根源” と有意な正の相関を示していた (労働の対価: $r=.21, p<.05$; 獲得困難性: $r=.24, p<.05$)。“労働の対価” と “諸悪の根源” の関連は, お金は仕事の結果得られるものだと考えている人ほど, お金の悪影響を強く意識する傾向にあることを示唆している。“労働の対価” で測定されている内容は, 労働の結果適正な金額のお金が手に入る経験を積み重ねたために形成されると考えることもできるが, 一方で, 労働の結果, 期待以下の金額しか手に入らないという経験によって強く意識されるようになる可能性もある。そして, 後者のよ

うな体験の多い人は, “諸悪の根源” に含まれる, お金のせいで社会的な不公平や犯罪が起こるという考えを強く持つであろう。よって, この関連については, 労働から期待されるよりも少ない金額しか得られなかった人において, “労働の対価” と “諸悪の根源” が高いという状態が考えられる。次に, “諸悪の根源” には, 必要以上のお金を持つことによって悪影響があるという内容も含まれているために, “労働の対価” と相関を示したものと考えられる。また, “獲得困難性” と “諸悪の根源” の関連は, お金が手に入りにくいと考えている人ほど, お金は悪いものであると考える傾向にあることを示唆している。手に入りにくいお金を悪いものと考えてることによって, 認知的不協和を防いでいる可能性もあるが, 本研究のデータは一時点のものであるため, 因果関係まで言及することは難しい。予測された関連が示されたことから, 本尺度がお金に対する認知的側面を測定していることが確認された。

次に, お金に対する信念尺度と就業動機尺度の相関係数を求めた (Table 6)。お金に対する信念尺度の “労働の対価” が就業動機尺度の “探索志向”, “対人志向”, “挑戦志向” と有意な正の相関を示し ($r=.18\sim.40, p<.05$), 予想がおおむね支持された。これは, “労働の対価” は就業動機の下位尺度すべてと関連を示すという予測とは一部異なる。しかし, 関連を示さなかった “上位志向” は, 労働の中でより高い評価を得ることへの動機であることから, お金を労働への報酬と考える “労働の対価” と関連を示さなかったと考えられる。また, 予測どおり, “獲得困難性”

Table 7 アルバイトの状況によるお金に対する信念下位尺度の得点の *t* 検定

	アルバイトの状態				<i>t</i> 値	<i>df</i>
	している		していない			
	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>		
ネガティブな影響源	3.15 (405)	0.75	3.10 (219)	0.85	0.81	399.6
労働の対価	4.03 (406)	0.68	3.89 (220)	0.70	2.47*	624
獲得困難性	4.30 (404)	0.65	4.26 (218)	0.65	0.72	620
ポジティブな影響源	3.22 (404)	0.65	3.13 (217)	0.68	1.57	619
重要性	4.42 (404)	0.53	4.27 (220)	0.59	3.07**	622

注) カッコ内は *n*。* $p < .05$, ** $p < .01$ 。

は就業動機と有意な関連を示さなかった。さらに、“ポジティブな影響源”と“重要性”が就業動機尺度の“上位志向”と有意な正の相関を示し(いずれも $r = .28, p < .01$)、予想と合致した結果が得られた。

続いて、お金に対する信念尺度と REC Scale の相関係数を求めた (Table 6)。お金に対する信念尺度の“労働の対価”、“獲得困難性”、“重要性”が REC Scale の“合理性”と有意あるいは有意傾向の正の相関を示し、予測と合致した結果が得られた (労働の対価; $r = .19, p < .05$; 獲得困難性; $r = .18, p < .05$; “重要性”; $r = .17, p < .10$)。また、“ポジティブな影響源”と“情動性”の間 ($r = .18, p < .10$) に有意傾向の正の相関が見られた。よって、予測が支持されたと言える。

最後に、アルバイトの状態について分析を行った。アルバイトをしている者 (406 名) としていない者 (220 名) でお金に対する信念尺度の得点が異なるかどうかを確かめるため、対応のない *t* 検定を行った (Table 7)。その結果、“労働の対価”と“重要性”において、効果量の値は小さいながらも有意な差が見られ、予測と一致した結果となった (労働の対価; $t = 2.47, p < .05, d = 0.21$; 重要性; $t = 3.07, p < .01, d = 0.26$)。しかし、予測と異なり、“獲得困難性”で 2 群の得点に差が見られず、アルバイトをしているか否かによって、お金は手に入りにくいという考えの程度に差はないという結果となった。

本調査 2 お金に対する信念尺度の再検査信頼性の検討

目的

本調査 1 では、 α 係数を用いた内的一貫性を検討するに留まったため、尺度の信頼性を十分に確認したとは言い切れない。そこで、本調査 2 として、同一の調査協力者に 2 度にわたって調査を行い、再検査信頼性を検討する。

方法

調査協力者 関東地方の私立大学 1 校の学生 92 名が調査に協力した。1 回目の調査における年齢の平均は 18.91 歳 ($SD = 0.94$)、であった。性別は、男性が 29 名、女性が 63 名であった。

調査時期 1 回目の調査は 2013 年 6 月中旬に実施した。2 回目の調査は、同年 7 月上旬に実施した。1 回目の調査と 2 回目の調査の間は約 3 週間であった。

調査内容 (a) お金に対する信念尺度: 本調査 1 で作成された 5 下位尺度 30 項目を用いた。(b) ID: 2 度の調査間で、調査協力者の対応を図るため、所有している電話番号の末尾 5 ケタを記載してもらい、個人用 ID とした。(c) デモグラフィック変数: 性別、年齢について尋ねた。なお、いずれの調査でも、用いた質問紙は同一の内容であった。

調査手続き 質問紙は、授業時間の一部を利用して実施した。倫理的配慮は本調査 1 と同様であった。

結果と考察

相関係数の算出 各下位尺度について、1回目の得点と2回目の得点の相関係数を算出した。その結果、“ネガティブな影響源”では $r(87)=.80$ ，“労働の対価”では $r(88)=.58$ ，“獲得困難性”では $r(90)=.73$ ，“ポジティブな影響源”では $r(89)=.76$ ，“重要性”では $r(88)=.83$ といずれも1%水準で有意な正の相関が得られた。“労働の対価”でやや低い値となっていたほかは、十分に高い値が得られた。“労働の対価”の相関の弱さについては、調査対象者の属性と調査時期の影響が挙げられる。平均年齢から、調査協力者は大学1年生であると考えられ、さらに調査時期は夏休みの直前であった。そのため、1回目と2回目の調査の間に、夏休みにアルバイトを始める計画を立てていた者も含まれていたかもしれない。“労働の対価”は、本調査1においてアルバイトの状態により得点に差が見られることが明らかになっているため、アルバイトを計画した者がいたことによって、相関が低くなった可能性がある。しかし、中程度の正の有意な相関は得られているため、尺度全体として考えた場合には、おおむね十分な再検査信頼性が備わっていると判断することができる。

総合考察

大学生用のお金に対する信念尺度を作成することが本研究の目的であった。文章完成法の結果から尺度に使用する概念を選定し、予備的に因子分析を実施した後、本調査にて、最終的に5下位尺度30項目から構成されるお金に対する信念尺度が作成された。また、既存の尺度との関連を検討し、基準関連妥当性および構成概念妥当性の確認を行った。さらに、2回の調査を行い、おおむね十分な再検査信頼性が備わっていることを確認した。

作成された尺度の内容について考察すると、5つの下位尺度は次の3点の特徴を持つと考えられる。第一は、“ネガティブな影響源”と“ポジティブな影響源”が示す、お金が人に影響を与えるという考えである。これは、お金は人によって作られながら、人間に影響を与えるという特殊な性質を持つ道具であることを反映した内容となっている。人間は、お金から、ゆとりなどのよい心的状態や、人間関係上の困難などを生じると考えていることが示さ

れ、お金の持つ心理社会的な影響力が示唆される結果となった。また、内容面として、下位尺度として採用されたポジティブとネガティブという区分はMES (Tang, 1992)では“善”および“悪”下位尺度として採用されている。妥当性の検証で利用した原岡(1990)の尺度の“お金の社会的価値”および“社会における諸悪の根源”とも類似の概念といえる。このようなお金に対するポジティブ、ネガティブな見方は本研究でも見出されたため、重要な概念であるといえる。

第二は、“労働の対価”と“獲得困難性”が示す、収入に関する側面である。収入は家計の重要な機能であり、家計に関わる考えが測定可能になったことは有益であると考えられる。また、これら2つのお金の入手に着目した下位尺度は既存の尺度では見られないものであり、本尺度の特徴である。

第三は、“重要性”が示す、生活を送るうえでのお金の重要性である。お金は生活を送るうえで必要であるという内容から、お金は道具として重要であることが示唆される。第一の側面では、お金の持つ、人間への影響力について述べたが、第三の生活上の重要性は、心理社会的性質の少ない内容となっている。重要性に関しては、生活との関係の深い内容であるため、家計などのより経済的な営みと関連がある可能性がある。重要性の概念は、LOM (Tang & Chiu, 2003)でも“重要性”下位尺度として取り上げられているため、今後の研究結果を先行の知見と比較検討することが可能である。

妥当性は、尺度全体としてはおおむね確認されたと言える。しかし、“獲得困難性”と、アルバイトの関連については、アルバイトをしている者としていない者の間で得点に有意な差が見られず、構成概念妥当性を検証することができなかった。本研究では、アルバイトをしているかどうかを、「現在アルバイトをしているかどうか」としてたずねたため、調査時点ではアルバイトをしていないが、以前した経験がある人々が、アルバイトをしていない群に振り分けられていたために、予測が支持されなかったと考えられる。“獲得困難性”は現在のアルバイトの状態ではなく、アルバイトの経験の有無により得点が異なる可能性がある。今後は、“獲得困難性”が高いほど節約行動や貯蓄行動を行うという仮説を検討するなどして、“獲得困難性”の構成概念妥当

性を検討すべきであろう。

最後に、本研究の限界と今後の展望について述べる。本研究では、大学生を対象として調査を行った。しかし、先述のとおり、大学生は社会人と比較して、経済的な体験が未熟である。そのため、本研究から得られた知見がどの程度社会人に対して適用できるかは不明であり、知見の一般化は慎重に行うべきであろう。同様に、本研究で作成された尺度が社会人に適用可能かどうか、今後改めて検討する必要がある。

また、本研究では経済的背景については取り扱わなかった。しかし、経済的背景はお金に対する信念に影響している可能性があるため、今後はその点も考慮して研究が行われるべきであろう。

今後は、お金に対する信念が、収入、消費、貯蓄といった、個人の家計行動にどのような影響を与えているのか検討していく必要がある。加えて、大学生では就職活動が大きな課題として存在することから、お金に対する信念と就職活動の関連を検討することも有益であろう。さらに、大学生を対象にして作成された本尺度が、社会人や高校生など、ほかの属性の人々に適用できるか検討することも必要である。

付 記

本論文は、筆者が2010年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した修士論文の一部をもとに加筆・修正したものである。また、本論文の一部は日本心理学会第76回大会（2012年、専修大学）で発表された。

引用文献

- 安達智子 1998 大学生の就業動機測定の試み 実験社会心理学研究, **38**, 172-182.
- Furnham, A. 1984 Many sides of the coin: The psychology of money usage. *Personality and Individual Differences*, **5**, 501-509.
- Furnham, A., & Argyle, M. 1998 *The Psychology of Money*.

London: Routledge.

- 原岡一馬 1990 お金に対する態度と価値志向 I—態度の構造と態度尺度の構成— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, **37**, 199-216.
- Hayhoe, C. R., Leach, L., & Turner, P. R. 1999 Discriminating the number of credit cards held by college students using credit and money attitudes. *Journal of Economic Psychology*, **20**, 643-656.
- 片平光明 2003 第12章 貨幣市場と利子率の関係を考えてみよう 長谷川啓之・太田辰幸・関谷喜三郎・片平光明・安田武彦（共著）初心者のための経済学 創土社.
- Li, D., Jiang, Y., An, S., Shen, Z., & Jin, W. 2009 The influence of money attitudes on young Chinese consumer's compulsive buying. *Young Consumers*, **10**, 98-109.
- Lindgren, H. C. 1980 *Great Expectations—The Psychology of Money*. California: William Kaufman, Inc. (リンドグレン, H. C., 原岡一馬（訳）1988 お金の心理学 有斐閣)
- 佐々木士郎 1984 消費者購買態度の合理性と情緒性の測定 関西大学社会学部紀要, **16**(1), 1-26.
- Sohn, S., Joo, S., Grable, J. E., Lee, S., & Kim, M. 2012 Adolescents' financial literacy: The role of financial socialization agents, financial experiences, and money attitudes in shaping financial literacy among South Korean youth. *Journal of Adolescence*, **35**, 969-980.
- Tang, T. L. P. 1992 The meaning of money revisited. *Journal of Organizational Behavior*, **13**, 197-202.
- Tang, T. L. P., & Chiu, R. K. 2003 Income, money ethic, pay satisfaction, commitment, and unethical behavior: Is the love of money the root of evil for Hong Kong employees? *Journal of Business Ethics*, **46**, 13-30.
- Tang, T. L. P., Kim, J. K., & Tang, D. S. H. 2000 Does attitude toward money moderate the relationship between intrinsic job satisfaction and voluntary turnover? *Human Relations*, **53**, 213-245.
- 渡辺伸子・佐藤有耕 2010 お金に対する態度に関する心理学的研究の動向 筑波大学心理学研究, **40**, 61-71.
- Yamauchi, K. T., & Templer, D. I. 1982 The development of a Money Attitude Scale. *Journal of Personality Assessment*, **46**, 522-528.

(受稿: 2013.7.18; 受理: 2014.2.20)